

長期連載論文 第4回

文明の輪廻転生

—アトランティス異聞—

第三章 海の巨石。足摺、ポナペ、コスラエ

会長 渡辺豊和

足摺岬に縄文の巨大光 通信基地発見

足摺岬には何度も行く機会に恵まれた。私の仕事の相棒だった川崎福則（九五年物故）は中村市出身で彼が中村に帰る用事がある時に何度か一諸した。そのうち足摺岬に足を伸ばしたこともあった。しかしその時に巨石遺跡が存在するなど夢にも思ってみなかつた。中村市を最初に訪ねたのはもう一〇年以上、一五年は経っているかもしれない（九六年現在）。川崎とある小さな喫茶店でお茶を飲んでいた時、隣の席のテーブルに『幡多の太陽の道』とワープロ文字で書かれたホツチキス止めの小冊子が置かれているのが眼に止つた。それを取つて読み始めたら結構面白い。幡多とは中村市も含まれる

高知県西部のことである。その時川崎は高校の同期生と話し込んでいたが私が余り熱心に読んでいるものだからその友人が著者を呼びましようかと言う。近くですと言ふから頼み電話をしたら五分程度で眼鏡をかけた小柄だが太りぎみの色の恐しく黒い男が表われた。それが西沢孝との出合いであつた。当時は電気店で働いているとのことであつたが現在は独立して電気店を經營している。これ以後西沢とは中村を訪れるごとに会い話す様になり後には川崎抜きでもわざわざ中村に出かけ西沢と合つた。西沢は『縄文夢通信』を書くきっかけとなつた『サンデー毎日』の『日本にピラミッドがあつた』と言う連載特集記事の中で特に私が中心になつた個所に興味を持つてゐる、まさかその本人と自分の家の近くで会えるとは夢にも思わなかつたと驚いていた。

足摺に巨石があるから行こうと

誘われたのは二度目に中村を訪れた時のことである。西沢は小学校の頃ここに住んでいたと言い、四国八八ヶ所の札所である金剛福寺やその周辺の地理は特に詳しかった。西沢が案内してくれたのは金剛福寺の境内近くにある明日香の亀石によく似た巨石である。彼は亀石と呼んでいるがそう言えばそう見えるかなと言う程度でありこれはそれ程興味は沸かなかつた。唯この「亀石」を先頭として巨石が數十個一列に一直線をなしていってこれには何か意味がありそうであつた。奈良の三輪山頂にも巨石が冬至の日没方向に一列に一直線をなしていることをすでに見知っていたからここは脈がありそうだとは直観した。但し磁石を忘れて持参していかつたのでこの時は正確な方向を知ることはできなかつた。西沢がもう一つ見せてくれたのは巨石と巨石に挟まれた五〇

ドクロ印と文字らしき紋様の線刻画である。西沢は大昔の海賊が残した金銀財宝の隠し場所を示す暗号ではないかと言う。私にはそんな興味はもとからなかつたから話としては面白いが余り興味を示しはしなかつた。とは言え西沢が案内してくれたことで足摺は注目すべき場所であることが解つた。後になつて西国八八ヶ所を巡りその上に位置していること『発光するうち六六個所が計七個の古代卵形アトランティス』を発見し足摺の金剛福寺も当然卵形上にありこの近くに卵形のストーンサークルが存在するのではないかと予想した。果せるかな今から三年前（一九九三年）に巨大卵形ストーンサークルを発見することになった。

巨大卵形のストーンサークルの発見は全く意外なことから始つた。西沢から電話があり是非足摺に来てほしい、については高知県選出で足摺のある土佐清水市出身の参議院議員が巨石に興味を以前から持つていてその人と神戸港から一緒に来る様にということである。神戸港から関西汽船に乗るとその議員はすでに乗船していて真夜中海を渡るのであるがその議員と同行アトランティス』を発見し足摺の金剛福寺も当然卵形上にありこの近くに卵形のストーンサークルが存在するのではないかと予想した。果せるかな今から三年前（一九九三年）に巨大卵形ストーンサークルを発見することになった。

これが自然の岩かストーンヘンジやカルナックと同じ巨石遺跡か鑑定してほしいと言うのが平野が私に依頼したいことであつた。彼は幼少の頃からこの岩が好きでよく遊び場としたが長じてヨーロッパの巨石を見るに及んでこれは巨石遺跡ではないかと思いはじめた。長らく忘れていたがついこの前から又気になり始め誰か専門家に鑑定してもらいたいと思いたまたま中村の西沢と親しくなり私の存在を知つたとのことであつた。その日着いてみてはじめて知つたのだが実は土佐清水の商工会館で私が巨石について講演することになつてしまつた。議員は平野貞夫、政治家にしては詩人タイプであり又大変なロマンティストであった。世界の巨石を巡つて来たと言うだけあって実に詳しい。土佐清水港に入れる前、丁度明けて来て対岸の光景が見え始めた時に山の中腹からせり出した巨岩が見えて來た。あ

唐人岩と言ふ超巨石

海から見えていた岩は近付いて見ると五メートル立方もありそ

れが自然の岩かストーンヘンジやカルナックと同じ巨石遺跡か鑑定してほしいと言うのが平野が私に依頼したいことであつた。彼は幼少の頃からこの岩が好きでよく遊び場としたが長じてヨーロッパの巨石を見るに及んでこれは巨石遺跡ではないかと思いはじめた。長らく忘れていたがついこの前から又気になり始め誰か専門家に鑑定してもらいたいと思いたまたま中村の西沢と親しくなり私の存在を知つたとのことであつた。その日着いてみてはじめて知つたのだが実は土佐清水の商工会館で私が巨石について講演することになつていた。その前に鑑定を見ようと集つた人々と現地に同行するスケジュールが組まれていた。サンデーニュースが組まれていた。毎日や高知新聞の記者も来ていて誠に大袈裟なことになつているのには驚いてしまつた。

な巨石がいくつも重なり合う組石である。これを見ただけでは簡単には巨石遺跡かどうかは判断し難い。内心困ったと思つていたが西沢はもともと整然と積まれていたのが何かの原因で崩れてしまつたのではないかと言う。それも確實には言えそうにない。この組石は自然なか人工なのか、唐人岩と地元の人々は呼んでいると言う。唐人即ち異国人である。唐人岩といふ呼び名にはこの世にざらにあるのではない不思議な岩と言う地元の人々の認識が表明されているのである。大昔から唐人岩と呼んでいたそうである。小高い山の中腹にそれはあり草木を分けて三〇メートル程登つて行くと突如眼の前に表われる。巨石がテラス状に張り出していくそこに上ると太平洋が一望できた。私の今までの経験からも間違いなく人工の巨石遺跡とは思うのだがペルー、クスコの時の様にはいかない。あそこ

では積まれた巨石の下部に人一人が辛じて通り抜けられそうな岩と岩の割れ目がありそれが正確に東西を指しそこから春分と秋分の日の出の光が入つて来る仕掛けになつてから問題はなかつた。唐人岩でははつきりと人工と判断できる方向指示の標識がないのである。しかしこの岩のテラスから降り山も降りて平地に人々が集つた時、スポーツ茹りの細いすらりとした一人の中年男が航空写真を私に示しこれが唐人岩ですがここから近くの公園に行つてそこでまず感想を述べてほしいと言う。その男がこれ以後重要な役目を果すことになる土佐清水市の職員富田無事生である。彼が広げた航空写真を見てびっくり仰天してしまつた。彼がこれから行くと言う公園の形がまさに古代卵形そのものではないか。この卵形に沿つて石が並べられていないかと聞くとそうなつているどうしてわかるのかと彼の

方が驚いている。さつそくそこに急行し公園の外周を巡ると石が殆ど切れ目なく等間隔で置かれている。これこそ間違いなくストーンサークルである。このサークルを唐人駄場と呼んでいると言う。この時になつてようやく唐人石と唐人駄場が対になつた巨石遺跡であることに確信を得たのである。「駄場」とは平地と言うことである。両方とも唐人と呼ぶからは唐人岩が人工の組石であることは間違いないあるまい。

唐人駄場は卵形の
広大な環状列石

唐人駄場は長手ほほ二〇〇メートル、短手一七〇メートル強の大きさで、中心部は直径四〇～五〇センチ程度の丸石が点々と置かれているに過ぎない。よく見ると後に石垣にしたと思える所もあり戦後ここを開墾して畑にしていた時もあつたと言うから石垣はその時に積まれたのかもしれないが総じて低く猪を防ぐ役には立ちそうにもない。唐人駄場のストーンサークルを発見した時は実は南イングランドにもカルナックにも行つてはおらず本で知つた知識で比較していた。広大なス

しく広大なストーンサークルである。余りの広大さに驚きもした。現場から引き揚げて講演となつたから会場は大変な熱気に包まれることとなつた。但しあの石は「シガキ」即ち猪が侵入して来ることを防ぐ石垣であると人々は言つていると反論もあつた。シガキを整然とした幾何学形古代卵形に配置されるはずもなく第一はつきりとした石垣にはなつていなくて直径四〇～五〇センチ程度の丸石が点々と置かれているに過ぎない。

トーンサークルはその当時未だ実見していないからこの時はその広さに戸惑つた位である。後にアヴェベリーを見てこれよりも遙かに広いものがあると知つて安心もしたがこの時の不安はその広さであつた。秋田県大湯のストーンサークルは直径五〇メートルを少々越える程度であり小樽近郊のものやその他のストーンサークルも大湯の規模を越えるものではない。直径が二〇〇メートルもあるものなど想像してみるともなかつたからこんな巨大ストーンサークルは果して外国にも例があるのかこの発見時点では自問自答していたのも確かである。ことによつたら外国にも例を見ない巨大ストーンサークルではあるまいか。もしそうだとしたらこれは何なのか。勿論前述した四国八八ヶ所の七つの巨大卵形と無縁であるはずはない。足摺岬の金剛福寺は室戸岬を結ぶ卵形の最西南端に位置し北東の室戸岬と

は長軸を形成しこより卵形は丁度半分海に消えて行く。唐人駄場は公園化されていたから航空写真にも卵形はくつきりと表われていたので気付くのは早かつた。同じ航空写真を凝視していると近くに唐人駄場ほどの規模ではないが二つの卵形が見えている。一つは唐人駄場より中心間で一五〇メートル東。長軸で一五〇メートル、短軸で一二〇メートル、他の一つは中心間で北に一五〇メートル。長軸で一〇〇メートル、短軸で九〇メートルである(図3-1)。但し現在では卵形上に配石は殆どなくなり境界がかすかに盛り上がつ

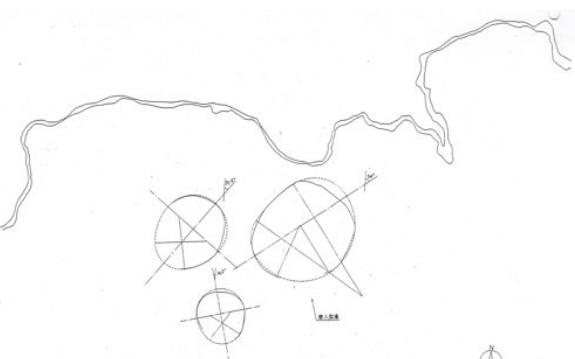


図3-1 唐人駄場の卵型 (ストーンサークル)

ているだけである。牧草地となつていてこれをを作る時に除去してしまつたらしい。残念なことではある。三つの卵形ストーンサークルが肩を寄せ合う様に作られていたのは金剛福寺からさ程遠い位置ではないから巨大卵形が海の大渦としたらこちらは小渦なのかもしれない。室戸岬にも似た卵形ストーンサークルが発見される可能性が高いとは思うが今の所そんな話は

聞かない。ともあれ唐人駄場である。イングランドのアヴェベリーを見て石の配列原理が実によく似ていることに気付いた。アヴェベリーはトム博士の解析によれば三辺の比三、四、五の整数比の直角三角形によってできる円弧の組合せによる図形である。但し卵が押し潰された形になっている。唐人駄場の卵形も長軸に対して左右対称ではないからやはり押し潰された形である。アヴェベリーには内部に二個の円形ストーンサークルがあるが唐人駄場にも長軸である南北軸の中心を点対称として南北にマウンドがあつて、そのマウンドを囲んで小さなストーンサークルがあつた。北の小サークルは現存するが南のものは今や除去されない。室戸岬にも似た卵形ストーンサークルが発見される可能性が高いとは思うが今の所そんな話は

トン・ウォールの内部にも二個円形建築があつたから唐人駄場遺跡はイングランドの遺跡に極めて近いと見てさしつかえない。但しダーリントンもアヴェベリーとともに内陸部に位置しているが唐人駄場は海辺である。この違いは注意して置くべきであろう。

唐人駄場を発見して興奮していたその夜、会食中に西沢がそう言えばあのサークルの中に巨石が直列に何列も立っていたぞと言い出した。ぼくは小さい時あそこでよく遊んだからよく覚えている。あれはどうしたんだと言うことになつた。西沢の話で咄嗟に思い浮べたのはカルナックである。この時には写真やその他の資料で知つているだけであつたがもし西沢の記憶に間違いないのであればこの唐人駄場は大西洋を挟んだイングランドとブルターニュの巨石遺跡の特徴を加算したものになる。これは大変なことではないか。

足摺巨石文化の特徴は 巨大さである

西沢の話に是非公園造営以前の状態に復元できないものかと努力したが仲々巧くいかない。唐人駄場発見以来何度も現地を訪れ、公園造成時にここから巨石を運び出した石屋にも記憶を聞くがはつきりしない。公園前には開拓者達によつて畑作がなされていたといいその時の写真が届けられたりしたが直列巨石を確認するまでは至らなかつた。しかし地元に巨石研究会も発足しそのメンバーの中に特に熱心な人が最近相当信憑性の高い復元図を作成し送つて来てくれた。小学校の先生だつたと言う宮崎茂であるが彼は石を運び出し

た石屋やこれを記憶している人々に聞き廻り相当精密な復元図を完成させた。これによると現在公園の入口に当る北に数列の直列立石群があつたらしい。西沢の記憶も同じ場所を示していたからこれはほぼ間違いないのではあるまいか。

唐人岩の背後にはサークル状を成すものや三個一組になつた組石等多数の人工配石(と思えるもの)がある。唐人岩も含めこれが人工配列か自然のままのものを調査する方が緊急を要したがこれもどんな方法が最適か解らず私達は苦労していたが西沢や富田の努力の甲斐があり神戸大学井口博夫氏が古地磁学的手法により解明してくれることになった。と言うのもこれと唐人岩は間違いなく対を成す遺跡であろう。

南北に長く山の斜面に突き刺す様に築かれた巨大なプラットホーム(又は神殿)は沖からもよく見える。これを灯台だと言う人もいるが確かに月光を反射しそんな機能も担つてはいたであろうが地図に唐人岩と唐人駄場を描いてみると岩の方は男根、サークルの方は女陰を思わせるからこの対比が示している意味の方がもつと重要ではあるまいか。

唐人岩の背後にはサークル状を成すものや三個一組になつた組石等多数の人工配石(と思えるもの)がある。唐人岩も含めこれが人工配列か自然のままのものを調査する方が緊急を要したがこれもどんな方法が最適か解らず私達は苦労していたが西沢や富田の努力の甲斐があり神戸大学井口博夫氏が古地磁学的手法により解明してくれることになった。と言うのも私達の人工配列説に対して真向うから反対を称えこれを潰してしまおうとする勢力があつて研究妨害の危機すらあつたからである。井口氏によれば自然のままの配列ならば石の中に残留している磁気方

向は一定方向を示すが人工や地震等によつて移動したものはバラバラであるとのことである。井口氏の計器による精細な分析により全ての組石やサークル等はバラバラを示し人工か地震等による移動配列であることが解つた（一九九五年八月二三日のレポート）。人工と言つていいであろう。これで私達も大手を振つて唐人岩とその周辺組石は人工配石遺跡と言えることになつた。ストーンサークルの整然とした幾何学配置等から人工配石遺跡であることには何ら疑問を抱いてはいなかつたが井口氏の応援は力強い励みとなつたのは間違いない。私自身唐人岩には一抹の不安を抱いていた。石組が余りに乱雑に見えたからである。西沢は整然と積まれていた巨大プラットホームが地震で倒壊したのではないかと言う。高知大学の地質学のさる教授の個人的見解としてBC三五〇〇年頃に大分から当地にか

けて巨大地震が襲い唐人岩もその時に崩落した可能性が極めて高いとのことであつた。その教授や井口氏の結果等から判断して西沢の見解は傾聴に値することが判明した。縦横高さが五メートル近い巨石が整然と積まれていたならばこのプラットホーム（又は神殿）はどんな形をしていたのか。巨石の散乱状態から類推し世界の古代巨石建造物を多数実見してきた体験、建築家としての直観等を働かせて復元してみることにした。結果は世界でも類例を見ない三段プラットホームであつた（図3-1-2）。幅の巨大プラットホームは唐人駄場の巨大プラットホームの中心の方向を向いている（図3-1-3・3-1-4）。

中心まで距離も二〇〇メートルはない至近にある。サークルの中の海までが一望のもとである。海上との通信も同時に行われていたかもしれない。ともあれ唐人岩にし

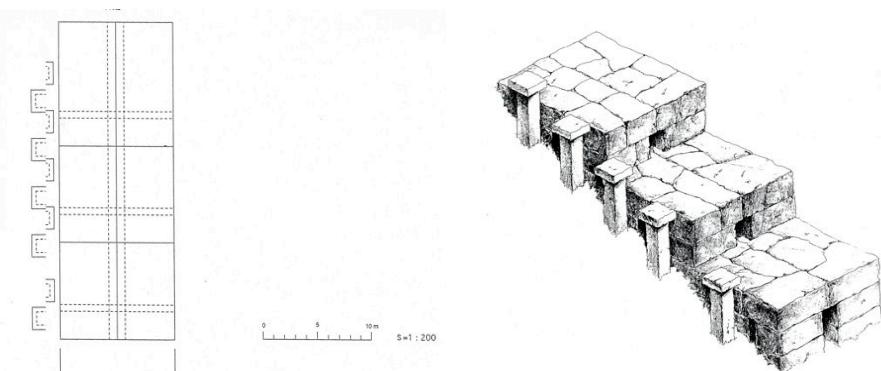


図3-2 唐人岩プラットホーム（神殿）復元予想図

ても唐人駄場にしても日本の巨石遺跡の中では群を抜く巨大さである。足摺岬と言う狭隘な場所に目を見張る巨大巨石遺跡が存在しているのは不思議としか言ひ様がない。

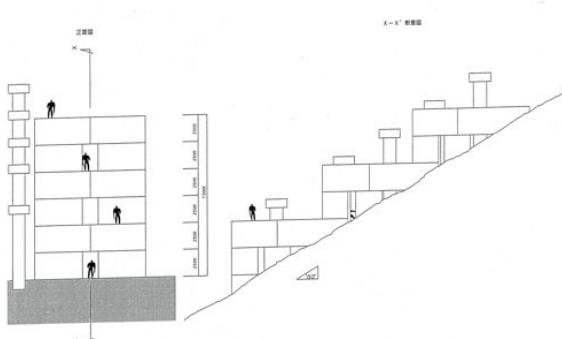


図3-4 唐人岩テラス復元立面図

四キロメートル四方の大規模巨石群

足摺の巨石遺跡は唐人岩と唐人駄場に尽きるのではない。標高四三三メートルの白皇山から南の足摺岬南端部にかけ約四キロ四方の広大な領域全面に巨石遺跡が存在する。しかもその密度は極めて高く、巨石はあるいはサークルになりあるいは組石となりあるいは積まれてしたり、要するに神社の御神体となつてている磐座や磐境、鏡岩等が至る所に散らばっていると考えてもらえばいい。岬の中で最も高くかつ神社のある白皇山山頂から南下したあたりの密度が最も高いがこの無数の遺跡を地図上にプロットするのは困難を極める。しかし全遺跡を地図上にプロットしてみない限りこの広域巨石遺跡の意味が解けそうもない。足摺岬

南端は山地であり殆ど平坦地がなく遺跡は斜面にあり樹木がうつそくと繁茂していくままでこれを取り扱わない限り各遺跡の巨石の組み合せはつきりわからない。富田や西沢達更には地元の巨石研究会の面々が樹木を取り払い簡単な測量をし、緯度経度計によつて遺跡の位置を確認し地図にプロットする作業が地道に始められた。ほぼ毎週土曜、日曜には山に出掛けその作業に没頭した甲斐があり二年もすると正確な巨石分布図ができるが、未調査の場所も残しあがつた分布図を送つてもらい私ではいるがほぼ全貌が見られるまでになつた。ようやくにしてでき手元の資料によればイングランドにはストーンヘンジを始め巨石遺跡が全域に存在することは知つていたがある特定の地域に密度濃く無数の巨石群が散在している例を知ることはできなかつた。これは大西洋を挟むストーンヘンジとカルナックに行くしかあるまいと決心して旅立つたのが九五年の六月だつたわけである。大学からのヨーロッパ出張要請もありこれにひっかけてのことであり極めて恵れた日程が組めたのは幸いであつた。

とは確信できるのであるが全体の意味が読めない。やはりこれはランダム配置でありこと更に意味はないのだろうかとさえ考え始めていた頃NHK出版から『オリオンミステリー』が刊行されこれがヒントとなつて数々のことがわかつて来た。このことは後述するとして四キロ四方にも亘る広大な場所に無数の巨石群が散在する遺跡は果して世界に他に存在するのか。手元の資料によればイングランドにはストーンヘンジを始め巨石遺跡が全域に存在することは知つてはいるが、未調査の場所も残しあがつた分布図を送つてもらい私は石積墳墓の墓室だつたことからすればこれが際立つて多かつたのであるから基本的にストーンヘンジ周辺と変らない巨石布置であると言える。即ちカルナックにして陵が主体となつた巨石遺跡群と言うことになる。双方ともに広大な平地であるが足摺岬は山地であるが、巨石群の中にもドルメン状のももあるがむしろ少い。ここはサ

前述したカルナック巨石群は直列配石を始め巨大メンヘル、ドルメン等、東西二五キロ強南北一五キロ強にまさにびつしりと布置されておりこれを巡つて始めて足摺岬の規模も驚くほどのものでないことを実感した。次にイングランドである。ストーンヘンジ東北三キロ強の所にダーリントン・ウォールを始め無数の小墳丘があり、ストーンヘンジ周辺南北八キロ強東西六キロ強の領域に遺跡が散在する。カルナックのドルメンも本来は石積墳墓の墓室だつたことから無数の巨石群が散在している例を知ることはできなかつた。これは大西洋を挟むストーンヘンジとカルナックに行くしかあるまいと決心して旅立つたのが九五年の六月だつたわけである。大学からのヨーロッパ出張要請もありこれにひっかけてのことであり極めて恵れた日程が組めたのは幸いであつた。

ークル型と三個又はそれ以上の組

石が圧倒的に多い。但し長さ三キロ近い土堤型の長塚がストーンヘンジの北一キロ近くにあるが足摺岬にも白皇山々頂のすぐ下から西南の斜面に沿つて長さ一五〇メートルの城壁型石組みがありこれがストーンヘンジの長塚を連想させる。いずれにしても足摺岬は墓陵主体の遺跡群でないことは確実である。大西洋を挟んだ二つの巨石遺跡群は墓陵を主体とすることから言つて間違ひなく巨大ネクロボリスである。それに対して足摺岬の巨石遺跡群は何なのか。エクアドルの海岸から縄文土器と全く同種の土器が多数出土したことがある。アメリカの考古学者エバンス博士の研究によればこの縄文型土器は南米に他の例もなく又これ以前にこの種の土器が出現する準備段階も全く見られず、突然表われたものだと言う。これは外部からもたらされたと考へない限り説明

できない。更にエクアドルからペ

ルーにかけて出土するミイラからは化石化した寄生虫が見つかっていて、それはアジアや日本列島に多い寄生虫であるとのことである。

エバンス博士は太平洋を渡つて南米にやつて来た人々がいたのではないかと考えていたと言う。九五年の五月初旬だったと思うが自身

も考古学者であるエバンス博士の夫人が土佐清水市で講演したのを聞いて誰しもが足摺岬から発つた人々ではないかと思つたものである。と言うのもエクアドル出土の土器と足摺岬出土の縄文土器の中

に酷似するものが多数見られるからである。又時代は弥生時代を大きく下るが『魏志倭人伝』の侏儒國が足摺周辺を指しているらしいことそこから東南に船で一年にして裸国、黒歎国に至るとある、その後も全く見られず、突然表われたものだと考へないと考へないかと容易に想像できたからである。(拙著『ヤマタイ国は阿蘇にあつた』光文社)。

理論と完全に一致した 巨石の存在

二三秒。東經一三一度五六分三一秒である。これはコンピューターによつて割出したものであり青森県北部から鹿児島県南部まで隈な表示されている。二万五千分の一の地図によれば海岸ぎりぎりの位置である。どうも崖の突端らしい(図3—7)。

そのことを証明するためには夢通信に於ける鏡岩の特徴そのものではないか。それならば足摺の無数の巨石群は全て鏡岩なのか。結論から言えば実はその通りなのである。

足摺岬の交点はあしずり港の南の突端にある。北緯三三度四六分



図 3-7 足摺周辺夢通信ネットワーク

上野伸4月17日発見作成

く関係にはならない。

即ち拠点Oからすれば
冬至の日出方向、緯度
に東南に二八度の線
(夏至線) へそ石は
乗つて来ないのである。

O点の光がへそ石に送
られるためには中継点
が必要となる。その中
継点をB点とするとB点は夏至線
上にありかつへそ石の冬至線上に
も乗つていなければならぬ。従
つてB点はO点の夏至線とへそ石
の冬至線の交点となる。計算上B
点は北緯三二度四四分二九秒東経

標高 0m
北緯 32 度 46 分 23 秒
東経 132 度 56 分 32 秒

0 地点/1995 年 4 月 17 日発見現場

岬全体が円錐台形の美しいピラミッドとなつてゐる。以前からこれがこの地方の夢通信ネットワークの重要な役割を担う装置であると見做していたからこれから冬至線とO点の夏至線の交点Aが実は局地的夢通信のネットワーク菱形ができることになる。処が拠点Oは海辺の低い所にあり標高四〇度三〇度〇分三三秒である。これで局地的夢通信のネットワーク菱形ができることになる。

処が拠点Oは海辺の低い所にあり標高四〇度三〇度〇分三三秒である。これで局地的夢通信のネットワーク菱形ができることになる。処が拠点Oは海辺の低い所にあり標高四〇度三〇度〇分三三秒である。これで局地的夢通信のネットワーク菱形ができることになる。処が拠点Oは海辺の低い所にあり標高四〇度三〇度〇分三三秒である。これで局地的夢通信のネットワーク菱形ができることになる。



標高 390m
北緯 32 度 44 分 29 秒
東経 130 度 00 分 33 秒

B 地点/1995 年 4 月 16 日発見現場

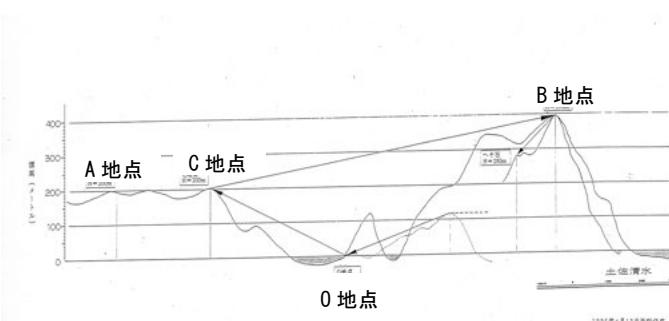


図 3-8 光通信の送信概念図

間の中継点ともなる（図3-8）。

直接見通せなく光のやりとりができないため先きのC点がOA二点

線とO点の夏至線の交点Aが実は局地的夢通信のネットワーク菱形となる。OA間に障害があり直接見通せなく光のやりとりがで

がこの地方の夢通信ネットワークの重要な役割を担う装置であると見做していたからこれから冬至線とO点の夏至線の交点Aが実は局地的夢通信のネットワーク菱形となる。OA間に障害があり直接見通せなく光のやりとりがで

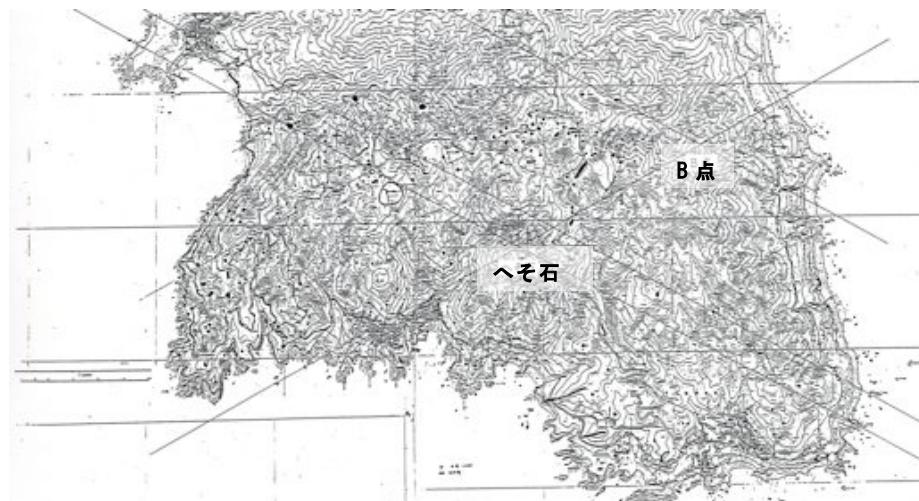


図 3-9 足摺の巨石配置と夢通信ネットワーク

以上が夢通信ネットワークが足摺岬で完全に機能しあつ巨石全体が鏡岩化するための最小条件である（図3-9）。

このことが計算通りに成立しているかは現地でその三点を探索してみるしか方法はない。そこで何時ものとおり大阪の工房から西沢

に連絡をとり仲間達に集つてもらひまる二日間かけて現地探索となつた。男女総勢二〇名を越す人々が土佐清水市で待ち受けていたのには少々驚きもしたがこの人達の熱心さのお陰で私の研究も随分助けてもらつていて心底ありがたかった。

まず海辺のO点から始めたがこれは高さ三〇メートルはある巨岩が海上からそそり立つてゐるまさに巨大な鏡岩そのものであつた。

背後は高さ五〇～六〇メートルの崖である。次にB点であるがこれ

は一日がかりになる険しい山中の難所だと言う。山歩きを趣味とする初老の仲間が皆を案内して山登りを始めるが確かに険しい。垂直に近い岩場すら随所にあつて少しづつ少しづつ前進するしかない。

ともあれ慎重に登つて行くのだがこの日はあいにく小雨混じりの天候となり足場が至つて悪い。それでも登り始めて二時間してめざす地点に到着。登つて来た途中には巨石はまるで見られなかつたのにそこにはさも当然と巨石が重なつて鎮座しているではないか。西沢は前この辺を探した時には何もなかつたのに不思議だと盛んに首を傾げる仕末である。組石の高さは一五メートル位はあり唐人岩とはいかないがそれに近い。白皇山山頂の東側であり西沢達は確かにこのすぐ近くまでは何度も来ていたのである。西沢は驚きが大きかったのかもしれない。帰り足を滑らせて相当ひどい捻挫をしてしまい

一足先に帰るはめとなつてしまつた。申し訳ないことであった。

次にA点であるがこれは平地の

道からは相当高く、登り難いこと

と頑健そのものの西沢の思わぬ怪我にはなれなかつた。しかし幸

いなことに近所の人にはこの山頂

(A点)のことを聞いたらあれは行者山と呼びつい最近まで山頂に

は神社があつたが今は麓に下して

いるとのことであつた。磐座や磐

境、鏡岩があるかどうか、確認の

ことはできなかつた。行者山即ち修

験道場であろう。それならば当然

巨石は鎮座しているであろう。こ

うして二日に亘る探査により夢通

信理論上割り出した地点に正確に

その位置に夢通信装置である巨石

が存在したのであつた。同行した

人々は一様に驚愕したのは言うま

でもない。これで光夢通信にいく

ばくかの疑いを抱いていた人達も

完全に信じることとなつた。

夢はポナペ島に

イギリスの軍人チャーチワードが太平洋上に今から一万年以上前にムーと言う大陸があつて、そこは樂園であり高度な文明を誇つていたが、一夜にして火山の大噴火により海に沈んでしまつたと言い出されたのは二〇世紀も初頭のことであった。日本では彼の著書は『ムー大陸の謎』として翻訳されている。古代ギリシアの哲学者プラトンのアトランティスに酷似した話である。チャーチワードはムー大陸が太平洋の丁度真中にあるこの文明の痕跡はミクロネシアやポリネシアにあつて、太平洋上に点々と散在するミクロネシア、ポリネシアの島々はムー大陸の一部で海

に沈まなかつた場所であるとも言う。特に彼が注目したのはミクロネシアのポナペ島にあるナン・マドール遺跡である。長さ三メートル直徑三〇センチほどの六角柱型の玄武岩でできた巨石が積まれ見事な宮殿が造営されていてここはムーの首都の跡ではないかと言う。しかもその巨大建築物の半分は海上に向つて斜めに傾き一部は海底へとずり落ちている。これこそムー大陸が海没した又とない証拠であると力説している。本の中の写真是不鮮明で謎めいている。この所の記述を読んで是非そこに行つてみたいと思ったのはもう二〇年近く前(九八年現在)のことである。

インドネシアのバリやジャワ、

スラウェシ等にはここ一〇年の間

に何回か旅したが太平洋上の孤島

ポナペにはどうして行つたらいい

のか皆目見当がつかなかつた。太

平洋の島々に詳しい民族学者や美

術学者に聞いてみてもどうもらち

があかない。行きたい行きたいとは思いながら何年も過ぎていった。ところが私の学生達にムー文明やボナペ島の夢の宮殿のことを話したら是非行きましょうとなり彼等に行き方を調べてもらつたら、何と大阪からミクロネシア航空で週に一便グアム島経由でボナペまで飛んでいるではないか。なんだそんなんに簡単だつたのかと大学院生三人と若い講師、私の計五人でボナペに飛んだのが九七年の三月も二〇日過ぎである。

日本の小さなローカル飛行場よりも更に一廻りも二廻りも小さい可愛い飛行場に着いた時は真昼間であつた。飛行場の建物から出たとたん色黒のオバサンがジドウシャ、ジドウシャと乗用車を指すから日本人観光客の客引きかと思つたら違つていた。彼等は自動車のことをジドウシャと言ふ。ホテルに着いて知つたのだが、ここは第二次世界大戦の敗戦まで三〇年間

は思ひながら何年も過ぎていった。ところが私の学生達にムー文明やボナペ島の夢の宮殿のことを話したら是非行きましょうとなり彼等に行き方を調べてもらつたら、何と大阪からミクロネシア航空で週に一便グアム島経由でボナペまで

飛んでいるではないか。なんだそんなんに簡単だつたのかと大学院生三人と若い講師、私の計五人でボナペに飛んだのが九七年の三月も二〇日過ぎである。

日本が統治していた島であった。ボナペ島は小豆島程度の大きさであるがこれと同位の小島五つでミクロネシア連邦を形成している。一つ一つの島は五〇〇キロから八〇〇キロも互に離れているから全て孤島には違ひない（図3—10）。

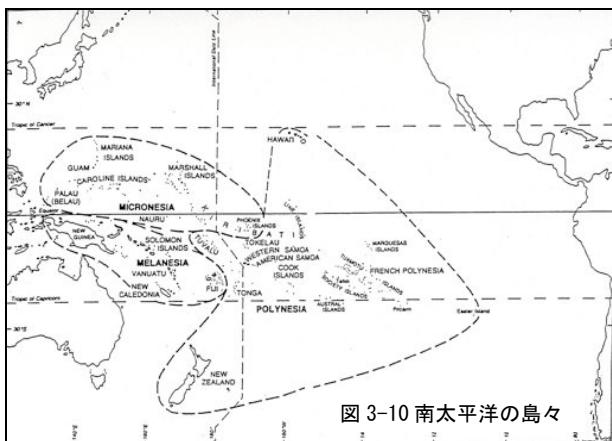
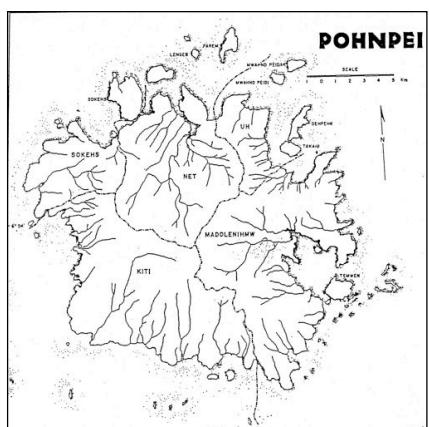


図3-10 南太平洋の島々

ナン・マドール遺跡には島の北端にある首都コロニアルシティから船で一時間であり島の東部にある。本島にぴたりくつつくようにして海上に浮く一周六〇キロ程の島の東に作られた人工島であった。ここはヴェニスそつくりの都市であつた。南北一・二キロメートル東西六〇〇メートルの中に無数の人工島がサンゴ環礁の中に作られ島と島の間は堀の役割を果してゐる。かつてはこの石積みの無数の島には宮殿や政庁、住宅、寺院等の建物が建てられていたと言う（図3—12）。現在ではナ

ン・ドアスと呼ばれる巨大石造墓陵がほぼ完全な形で残つてゐるだけである。これがチャーチワードの本にのせられていた写真の建物であつた。

ナン・ドアス島の大きさは幅五〇メートルに長さ六五メートル位で周囲は高さ五メートルほど幅三メートルの石積みの壁が廻されてゐる（図3—13）。



Hambruch's map of Nan Madol.

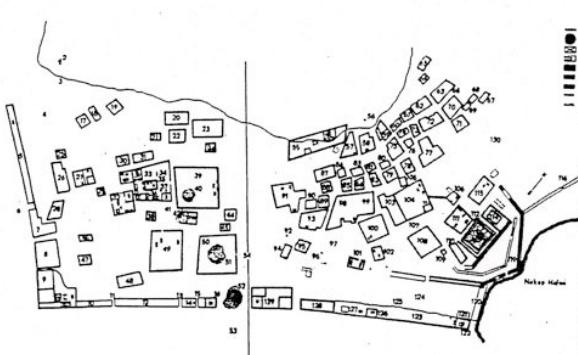
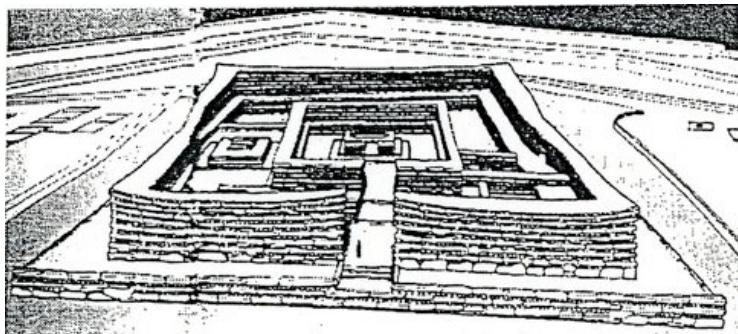


図3-12 ナン・マド



Morgan's drawing of Nan Dowas.

なさそうである。古いものでも A.D. 六〇〇年と言うのが歐米の学者の見解である。チャーチワードには考古学の知識が少なかつたことはあろうが多分彼はここには訪れていたが、伝聞で書いてしまったため見当はずれな記述になつたに違いない。しかしなン・マドール遺跡の中で唯一今から五〇〇〇年前は下らないはずだと言う養殖亀の化石が発掘されている。しかもこの遺跡の中には亀を養殖した池もある（翌年この島を訪れた時にそれは亀ではなく巻貝であることがわかつた）。ナン・マドール遺跡の大半を造営したのは A.D. 九世紀長さ三メートルほど直径三〇センチ位の六角形柱状石が横に何段も積まれている。このぶ厚い壁の中には同じく柱状石を屋根にした四メートル四方の半地下がありここが王の墓室だった。

但しナン・マドールはチャーチワードが期待した古代の遺跡では

なさそうである。古いものでも A.D. 六〇〇年と言うのが歐米の学者の見解である。チャーチワードには考古学の知識が少なかつたことはあろうが多分彼はここには訪れていたが、伝聞で書いてしまったため見当はずれな記述になつたに違いない。しかしなン・マドール遺跡の中で唯一今から五〇〇〇年前は下らないはずだと言う養殖亀の化石が発掘されている。しかもこの遺跡の中には亀を養殖した池もある（翌年この島を訪れた時にそれは亀ではなく巻貝であること

がわかつた）。ナン・マドール遺跡の大半を造営したのは A.D. 九世紀長さ三メートルほど直径三〇センチ位の六角形柱状石が横に何段も積まれている。このぶ厚い壁の中には同じく柱状石を屋根にした四メートル四方の半地下がありここが王の墓室だった。

ある。

ともあれナン・マドール遺跡のこの無数の人工島のほとんどは九

世紀以降に出来上がつたとしても中には遙か古代から使用されていなかった人工島もあつたことは確かである。従つてチャーチワードの見解も荒唐無稽とばかりにしりぞけることはできない。

壮大な海の遺跡

それにしても長さ一・二キロ強幅六〇〇メートルもある人工島の都市を一一世紀には作つていたのだからかつてのポナペの住人達は壮大なエネルギーをもつていたらしい。石造の建築は建造の時代はなかなかはつきりしない。木材とは違い●を使えないからである。

太平洋の人々はかつて高度な技術や航海の進路方向の正確な把握技術等は目を見張る高度さである。これ等のことからしても太平洋の人々はかつて高度な技術文明、特に巧みな航海による壮大な海洋文明を誇っていたのは確かである。

ナン・マドール遺跡も高度、壮大な海洋文明の痕跡には違いない。ナン・マドールを本格的に造営はじめたのは A.D. 一〇〇〇年頃

からと考古学者は言い切っているがこの遺跡の中でタパウと呼ばれる島からはAD二三二年と判定された生活痕も発見されている。ナン・マドールの人工島は全て玄武岩が島の外周に積まれ中にはサンゴの殻が全面に敷きつめられている。無数の人工島と言つたが正確には九二であつて大きいものでは一〇〇メートル四方をゆうに越す。現在では建築として形がはつきりわかるのはナンドワスだけであるがかつては九二の島全てに石造建築が建っていた。石造の土台の上に木造の宮殿が乗せられている場合もあつた。特に王の宮殿は巨大な石造の基壇の上に木造家屋が乗せられ壯麗を極めていたと言う。

ナン・マドールはサンゴ環礁の中にあるから水深は浅く干潮の時にはせいぜい五〇センチ程度で私達は島々を歩いて渡つた。水は深くて膝までであった。満潮で二メートル位になりナンドワスの堀（実際には海）に面した正面階段にすわつていると満潮時には海水がひたひたと足元に迫つて来る。真昼間でも静寂そのもののこの遺跡にいるとまさに天と地の間にたつた一人だけ存在しているのではないかと言う気分になる。「ナン・マドール」とは天と地の間と言う意味と聞いたがまさにそれを実感することになる。ここは現在も「聖地」で現地の人々はほとんど近づかない。近づくと祟りがあると信じている。私達一行も普通なら上陸時間が一時間以内なのに研究者と違うことで半日滞留を認められた。それでも私達を案内した小船の船頭はすぐ本島に上り私達が帰る時間になつて迎えに来た位である。要するに彼は祟りが恐ろしいのである。しかし私達も祟られたのかもしれない。帰りは大雨になつた体をこすり合つて海中の小島にいたのである。

それにもかかわらず、偉大な聖都を何のためにどのようにして造つたのか謎は一層強まるばかりであった。

遠浅の環礁の中なので恐怖感はそれほどでもなかつたが小船が燃料を補給して帰つて来るまでの二時間は滝のような大雨の中、心細いことこの上なかつた。五人で冷えた体をこすり合つて海中の小島にいたのである。

それでもヴェニスにも匹敵する壮大な聖都を何のためにどちら一〇〇メートルほどの山の山頂には逆鉢型の巨岩が天を突き差していたり、ようは奇岩、奇山の宝庫なのである。そこにヴェニスとも見違う海洋都市が造られたのであるからこれは唯事ではない。この想像を絶する不思議さはどうしても解明してみたい。私達五人はそう思つていたところポナペ島から東八〇〇キロの海の向うのコスラエ島にナン・マドールとほぼ同じ造りの宮殿遺跡があると聞き来日して方々を巡つたが奇妙な形の岩山が至る所に目につく。特にナン・マドールの西北二キロほどの

所にある岩山は高さ二〇メートル位の搭状でその背後に牛の背中に似た丸まつた小丘が控えている。二つ合せて日本の前方後円墳を立ち起した形である。これは人工かどうかはわからないがポナペの人々もこの奇妙な岩と小丘の組合せを神の造形としていてこれも聖所にかぞえられていた。又地上から一〇〇メートルほどの山の山頂には逆鉢型の巨岩が天を突き差していたり、ようは奇岩、奇山の宝庫なのである。そこには、

つてゐること。ポナペの王朝はAD一〇〇〇年から一六〇〇年

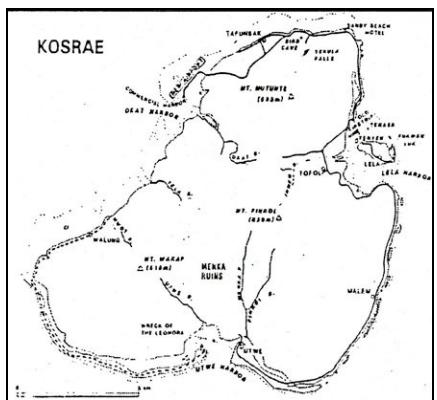
頃までシャウテレウでありその王都がナン・マドールであるがこの王朝最後の王が暴君で最高神官を迫害したので迫害された神官はコスラエ島まで逃げた。その神官の子がコスラエから三三三人の兵士を引き連れてポナペにやつて来て父の復讐を果し王となる。それが

イシヨケルケルでありこの王統が現在までも続いている。但し考古学的には前王朝の崩壊はイシヨケルケルの復讐ではなく、ポナペ各地の豪族の勢力が強くなり自己崩壊をきたしたものらしい。それでイシヨケルケル王朝はコスラエからの襲来であるのは伝説の通りではある。以上のこととは翌年三月、一九九八年三月に又講師と大学院の学生五人計七人がコスラエについて知ったことである。

コスラエ島はポナペ島よりも更に一廻り小さく現在人口八〇

○○と言ふ(図3-14)。この島民

等だと胸を張る。一事が万事こうである。
ポナペのナン・マドール遺跡に匹敵するのはレロ遺跡である(図3-15)。



民



図3-15 レロ遺

他二島計五島であり首都はポナペのコロニアルシティーである。コスラエでは宗教儀式の時に使う濁酒、シャカオの作り方をポナペの人々に教えたのは自分達であり今でもコスラエのシャカオの方が上

ナン・マドール同様本島の東部に位置するがナン・マドールは外洋を向いているのに対してもレロは港口湾を向いた内向きの都市である。しかもここは人工島ではなく一周三キロほどの小島の西側半分に作

られている。東西約五〇〇メートル、南北三〇〇メートル強の都市であった。ナン・マドールに比べると相当小さい。それでも厚さ三メートルはあるうかと言う高さ五メートル以上の石積み壁が稠密に立つていて城砦都市のおもむきが強い。ナン・マドールは宗教政治の都であるのに対してもちらは戦争用の城砦であった。この遺跡で注目すべきは墓陵である。石積みケルケルの王統が自分達の島出身であることを誇りに思つてゐることと無縁でなさそうである。ポナペもコスラエもミクロネシア連邦

でこの二島の他はトラックとその周囲四〇キロ弱の小島で又島の殆どが山であり平地は至つて少い。ポナペはそれなりに平地もあり現在の人口三万人に対してコスラエは八〇〇〇人であるのは昔からこちらの方がポナペの四分の一程度の人口しか養えなかつたことを示している。レロ遺跡が頑丈な城砦として作られているが同じ島内の

人々に攻められる危険性があつたとは思えない。そうするとこれは外敵を防ぐために作られたはずである。この場合の外敵はポナペ人だつたのではないか。それにしても八〇〇キロも離れた島からの外敵にそなえるのであるからミクロネシアの人々の航海術は如何に卓越していたか想像できる。

コスラエ島探査で注目したのはレロ遺跡よりも島の方々に見られるこの島にとつての古代集落や神殿群、墓陵群である。これは全て石造であるがレロ遺跡も含めてボナペ島ナン・マドール遺跡のナン・ドワスほどの完全形はない。しかしボナペもコスラエも玄武岩を積んで建築を作つていて工法には変りなく又様式にも殆ど差はない。

そのボナペと殆ど同じ技法、様式の建築の遺跡が島の方々にあるが、崩壊の仕方に差がある。最も完全な形を残すのがボナペ、ナン・マドールの NANDWAS であるが半分

以上崩壊したのがレロ遺跡の城壁であり最も崩壊が激しいのはよくよく見ると石積み壁だつたと思われるものである。自然に石が堆積したとしか思えないのだが、考古学者の研究によりかつては完璧な建造物であつたと証明されている。ほぼ完形から完全崩壊までの石造建築遺跡がボナペ、コスラエに散在している。特にコスラエは四段階位に崩壊の程度が分類できそうであつた。どうして崩壊の段階が順を追つてわかる具合に残つたのか不思議ではあるがこのことが実は高知県足摺巨石遺跡のかつての姿を復元するのに役だつたのである。

コスラエ島で忘れてはならないのは巨大寺院、シンラク遺跡である。島のほぼ中央にそびえるフィンコロ山は標高三〇〇メートル位である。この山の南斜面に巨大寺院跡がある。案内の現地人にジャングルの草木をなぎはらつてもらひながら私達七人とドイツ人夫婦、日本のお客さんと一緒に一四〇人でこの遺跡を訪れたのは最終日の午前中である。午後には帰国のために飛行場に向うことになつてから忙しいことではあつた。この遺跡を管理しているのは代々こここの司祭であったと言う案内的小父さんである。この人は滅多にこの聖地に外国人を連れて来ることはないとのこと。もう三年以上もいる協力隊の一人も今日がはじめてであった。私達が研究で訪れたことを理解してくれてようやく見学許可を得たのであり、他の

ボナペ、コスラエから 再び足摺へ

人々は便乗組となる。何回か川の浅瀬を渡つてから案内の小父さんが突然これがお寺ですと指さしたのは単なる瓦礫の山としか見えないゴロタ石の山である。しかしよく見ると部分部分に整然とした石積みの痕跡がある。高さ二メートルから二・五メートル位の石山であるが登つてみるとこれが一〇メートル角ほどの平坦な石造テラスが崩壊して山になつてしまつたのがよくわかる。但しテラスは前後に二段になつていて、上段が一〇メートル四方、下段も更に一〇メートル四方位である。しかも両段とも周囲一メートルほどの幅広縁がありテラス面は五〇センチほど下つている。これが小父さんが言うお寺の全容なのである。講師の松本正君にこれは神社だなど声をかける。彼もうなづく。テラスの上に建物が乗つっていたかどうかは今や確かめようがないがもし乗つても木造の小さな祠程度のも

のである（図3—16・3—17）。

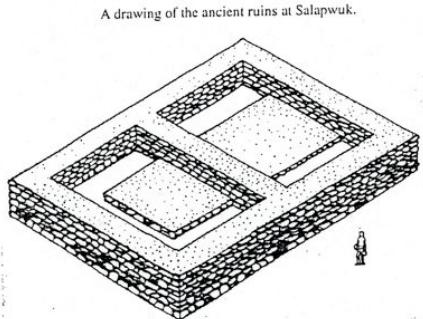


図3-16 ポナベ・コスラエのテラス型のモデル

寺院群は高野山や比叡山を彷彿させる。

小父さんによるとこのようなお寺が一〇〇以上あると言う。確かに少しづつ登っていくとあっちこっちにゴロタ石の石山がある。これが整然とした前後二段のテラスだったとしたら壯觀だつたに違ない。全てのテラスの長軸はフィンコロ山の山頂の方を向いている。ここではフィンコロ山が御神体なのである。いざれにしてもこの

このシンラカ寺院群を見ての帰り渓流沿いの食堂に寄つて学生達と話していくふいに稻妻が走り抜けた。そうだ。コスラエの遺跡群はそのまま足摺の巨石群に酷似してはいまいか。また、南の外洋に向つてパラボラ状になつてゐる地形もそつくりではないか。そこに今のシンラカ寺院群も含めて遺跡群が散らばつてゐる。そうか、足摺巨石群もコスラエの遺跡群に似た石造建築だったのかもしれない。一瞬閃いたことを松本君や学生達に話すと彼等は異口同音に先生帰国したら早速足摺に行きましょうと言う。

この閃きを誘つたのはシンラカの寺院群よりも前日の昼から探索した西側のシペン遺跡である。この遺跡に最初足を踏み入れた時には直径三〇セント位のゴロタ石があちこちに散在しているとしか見えなかつた。しかし方々を探査しているうちに石積みらしきものを見つける。こゝは考古学者が正規の遺跡と折紙をつけている所であると知つていたからその崩壊の激しさに驚いた。

唐人岩をはじめこの巨石の壮大には彼等は目を見張るばかりであった。例の女子学生に唐人岩周辺を歩かせてみるとシペン遺跡とそつくりなのは間違いない。これはあちらよりも巨大、壮大ではあるが建築遺跡に違ないと彼女は言う。松本君も他の学生もそう思つてゐる。唐人岩はもうすでに

大きな岩周辺と酷似していると渓谷沿いの食堂で気付いたのである。しかも地形的にそつくりの場所である。五人の学生の一人は女子学生で彼女が鋭い直観力で石積みやシ

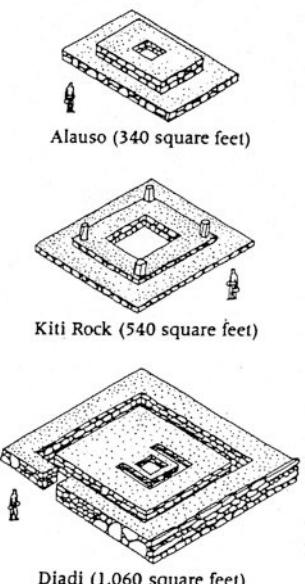


図3-17 テラスのモデル例

ヤカオを造るウス状の石、シャカオ石を見つけ出したり今度の探査では大活躍であつた。この女子学生を連れて行つて足摺との似具合を直観的に語らしてみよう。こうして帰国した後二ヶ月ほどして五月の下旬足摺にもう少し多くの大学院生と松本君とで訪れる。

私が二年前に巨大階段型テラスとして想像復元図を作製していたがその背後の巨石群もどうも建築であつたらしい。復元にはコスラエ、ボナベのぶ厚い壁で囲まれた城砦か神殿、更に階段テラスの墓陵を参考にすればよい（図3—18）。

但し時代が違う。足摺は土器その他の出土から見てBC三五〇〇年は下らないのにポナペ、コスラエはどう古くみてもAD六〇〇年、ほとんどは一世紀以降である。

そつくりの地形、海との関係、風の向き等から人間は時代と空間を超越して同じ感性と同じ想像力を働かせると考えるなら四五〇〇年も古い足摺遺跡がポナペやコスラエの遺跡に酷似していたとしても別に不思議なことではあるまい。

但しポナペやコスラエと同じ文化、文明圏であるニューギニアではBC四〇〇〇年のものとして石造の巨大な排水溝が発見されている。極めて精密に石積みされ高さも三メートルもある排水溝であるから太平洋一帯にはBC四〇〇〇年の昔から高度な文明が展開されていたのは疑えない。

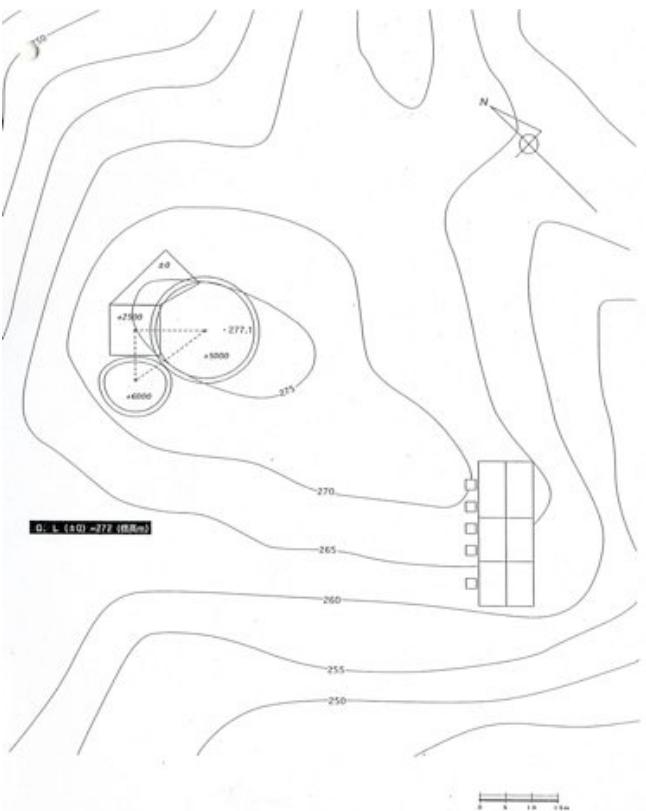
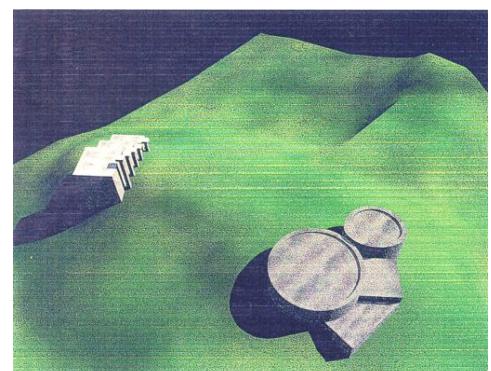


図3-18 唐人岩と神殿復元平面図

(図3-18) 唐人岩と神殿復元平面図

もう一つ発見した足摺の驚異

白皇山は足摺岬では俄然、高い山であり標高四〇〇メートル強である。この山の山頂から南に一直線に巨大な壁状に巨石が何列か並んでいる。かつては建築の壁ではなかつたかと以前から考えていたが確信がもてなかつた。しかしポナペ、コスラエ行きはその想像を確



信へと教えてくれた。これの復元は時間をかけてやればいいと思つていたが今度の足摺行きは思いもかけない発見へと導いた。この白皇山の山頂に隣接して台形のピラミッドがあつたと西沢君達が言い出したからである。何時も冷静な富田さんまで興奮している。ことはこうである。

ヘリコプターを飛ばして足摺巨石地を低空から見ていたら白皇山の隣にはつきりと台形の段状ピラミッドが見え白皇山も三角形の段状ピラミッドになつていて。と彼等は目撃談を言うのであるからそれは信じていい。これを言い出したのは白皇山頂に向つて登つている最中だったので余りに唐突で信じきれなかつた。彼等の言う通りなら今も二つのピラミッドが見えているはずではないか。しかし見上げると向うにそれらしき姿はない。うつそと樹木が茂つていてから見えないのかもしれない。山

頂に登つてもピラミッドの頂上にいる実感は全くわからない。

しかし彼等の言うとおりここが

三角形と矩形平面の段状ピラミッドであるとしたら恐しく巨大なものであろう。宿に帰つて二〇〇〇分の一の地形図を見ると確かに等高線が整然とした矩形と三角形の同心角になつていて。但し南面は

そうなのだが北面が急峻な傾斜となつていて私達は東南から登つたからピラミッドには見えなかつたのかもしれない。いずれにしても

地図を拡げてみて彼等が空からピラミッドを見たと言うのも頷けた。

壁状巨石はそのピラミッドの一部かも知れない。これも復元してみようと思ったのは勿論である。

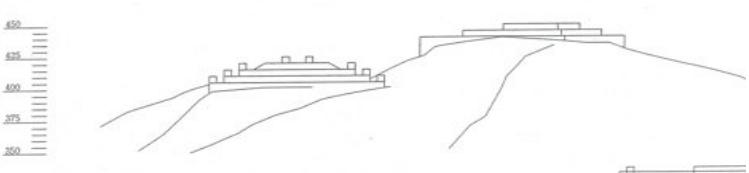
0) 矩形段状ピラミッドの下三段

四隅には五メートル立方の立方石が立ち、最上段のみは長手方向に台形平面となりテラス上に五メートル立方の立方石が向い合つて立つ。この立方石は現在でも段の隅に立つていて。

ば白皇山に二基の巨大ピラミッドがあつても不思議ではない。こんな場所は聖所となるのであろう。

この二基のピラミッドは岩山を

整形して作られたと考へた方が無理がない。結局復元してみたら一番下の基台が一二〇メートル弱と六五メートルの矩形段状ピラミッド、もう一つは底辺八五メートル、



コスラエ島の南部と足摺岬の南部の地形は酷似している。南西のシベン遺跡が唐人岩周辺だとしたら白皇山はフインコロに当る。フインコロの南麓のシンラカ遺跡が広大な寺院であったことからすれ



光通信網のフラクタル (無限自己相似) 構造

足摺巨石群の中で私達がへそ石と名付けた組石の位置からは比較的凹凸の激しい山地である岬南端の殆ど全域が展望できるからこれが夢通信のこの地区の拠点であるなら必ずやB点に夢通信用巨石が存在するはずである。全国ネットワークの交点である清水港のO点にそれ相応の鏡岩が存在しているはずであるのは確信していた。今まで北は東北北部から南は九州南部までの任意の二〇ヶ所近く交点を探査した結果そこには例外なく巨石か神社（たまには寺院）が鎮座していたからである。又五万分の一の地図に全ての交点をプロットしてみるとこれも一つの例外もなく都市の市街地に位置してはいる。それどころか集落にすら当つていない。東京圏や京阪神など面的に都市化している地域に於いても交点だけは不思議と市街地か

と聖域として崇められる場所でありここに居住することを恐れたからであろう。市街地に交点は唯の1ヶ所も位置していないことも先の確信を得る強力な根拠となつていた。ともあれ足摺では巨岩の鏡岩が海面上に突き立つていた。B点に鏡岩が存在したことにより足摺南端地区にはへそ石を中心とする夢通信ネットワークの細部機構が成立していたことが証明された。

要するにスケールは小さいが全国ネットワークと同様の菱形ネットワークがあつたと言うことである。O点で中継された光がB点に送られB点から更に細部化された菱形ネットワークの交点にある鏡岩に送されることになる。無数に散在する巨石は実は夢通信ネットワークの菱形がどんどん細部化して折り重なる入れ子構成になつてゐるがこれはフラクタル構造をしていることでもある（図3-2）。

トワークは全国スケールから局部的な地区レベルまでの入れ子型に構成されていることが判明した。しかしそれだからと言つて全国の各局地即ち現代の町村レベルにまで細々と夢通信ネットワークが一様に張り巡らされていたと言うわけではない。当然地方、地域によって粗密があった。これは現代の通信網が大都市ほど精密で僻地の寒村が粗雑であるのと同じことである。足摺ほど巨石が稠密にしかも広大な領域に散在する場所はまづ見られないことからしてもここは夢通信ネットワークの最重要地点の一つであつたに違いない。

足摺岬南端は夢通信の菱形ネットワークが局地に至るまで幾重にも折り重なる入れ子構成になつてゐるがこれはフラクタル構造を示していることでもある（図3-2）。

自然是フラクタル即ち無限入れ子の自己相似構造となつてゐると言われている。例えば宇宙と素粒子の構造は全く同じと言つていい。

極大と極小が相似構造を示す様にその間の無限の範囲に亘つて自然の構成物は相似の構造を有している。自然は数学的な整然とした構造を示さない至つてランダムな構成と思われていた。特に風景などはその最たるものと思われていた

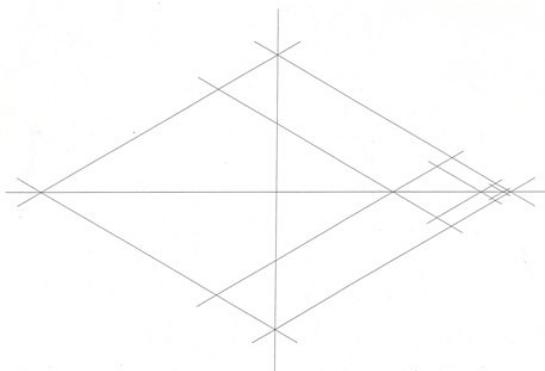


図3-21 夢通信ネットワークの入れ子構造

宇宙自然同様フラクタル構造を有していた。光通信は現代の無線通信に近い。現代には車や鉄道による人間自身の移動の流れと電気通信による二つの情報流があるが人体にたとえるなら後者が神経系、前者が血管等の循環系と言えるであろう。縄文夢文明にあつては循環系にあたる情報流即ち目に見える情報流はあつたにしても人々の移動の量も速度も微々たるものであ

局所ではこうして光通信機構が作られる

がフラクタル（無限自己相似）の発見によつてそとはなつていなかつたことが知られた。人間はミクロコスモスであると古代から言われて来たが古代の人々は人間のみならず宇宙内存在は全て大宇宙の鏡像、即ち似姿であると考えていた。この古代から指摘されて来た宇宙の無限自己相似入れ子構造が数学的にも真であつたことが証明されたのはついこの前のことである。夢通信、即ち水平太陽光の反射を利用する光通信のネットワークも宇

宙自然同様フラクタル構造を有していた。光通信は現代の無線通信に近い。現代には車や鉄道による人間自身の移動の流れと電気通信による二つの情報流があるが人体にたとえるなら後者が神経系、前者が血管等の循環系と言えるであろう。縄文夢文明にあつては循環系にあたる情報流即ち目に見える情報流はあつたにしても人々の移動の量も速度も微々たるものであ

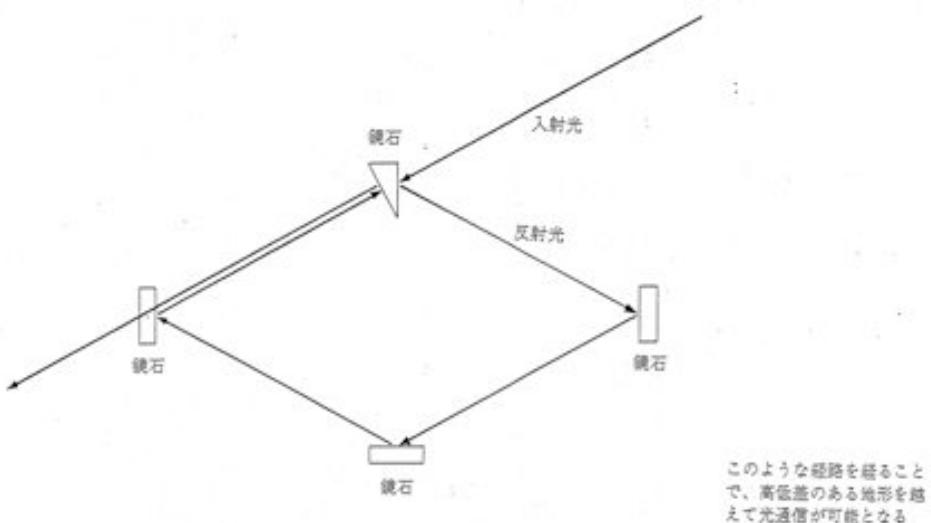
りまづは問題にならなかつた。従つて神經系の方が圧倒的に優勢な

文明であつたと言えよう。神經系とはいつたが厳密にはそとはいえない、現代でも電信には有線と無線があるが有線は間違なく神經系統に当り無線や縄文夢通信は東洋医学で言う経絡に当るであろう。

経絡は神經纖維と同じく解剖して目に見えるものではない。縄文夢通信は東洋医学と基本的には同じ思想と言うか同じ宇宙認識から成り立していると言える。

局所にあつても列島を覆う菱形ネットワークの極小型が成立していると言つた。この菱形は冬至線と夏至線によつて作られる図形であるが水平太陽光（日の出、日の入り時には太陽光は地平から射すから水平光線である）を反射し次々に遠隔地に送信するために鏡岩を必要とした。この鏡岩は二三分の日の出、日の入りの方向を正確に示している。磁石で計つてみると例外なく鏡岩が真東か真西、真南等を向いている。これは鏡が面の垂直線に対して入射角と反射角が同一であることによる。入射角度が真東を向いた面の垂直線に対し東北三〇度なら反射角は東南に三〇度となる。図によつて説明すれば極めて明瞭、たとえば夏至の日の出の光、緯度に対しても三〇度の方向から来た光を鏡岩で受けてこれを正反対方向、緯度

に對して西南三〇度方向に送ると



このような経路を経ることで、高低差のある地形を越えて光通信が可能となる

模式図

(図3-22) 巨石(鏡石)による光通信ネットワーク

1995年4月13日資料作成

すると夢通信ネットワークと全く同じ菱形の交点に他に三つの鏡岩を必要とする。しかも最初に受けた鏡岩の裏面は入射した光の正反対の方向に垂直な面になつていなければならぬ。これが一般的に列島ネットワークの交点の鏡岩の形状である。従つてこの鏡岩

の断面は三〇度、六〇度、九〇度の直角三角形となる。菱形の頂点となる四つの鏡岩は菱形の大きさによって互の距離が決るが最も近い場合はたとえばせいぜい五〇メートル四方程度の頂にセットして据えられている(図3-22)。三輪山山頂の巨石配置などはその好例である。遠い場合でも一キロ四方位に配置されている。足摺の布岬の円錐台形ピラミッドやA点は列島レベルのネットワーク交点O点に送る地域中継点である。足摺岬は巨石群が稠密に散在する特殊な場所であることとO点が海岸に面していて低所であること等から幾つかの中継点を必要としているが列島レベルの交点では一つの場所に四つの鏡岩がセットとして据えられていることが多い。四つの鏡岩はサークル状をなした磐境である多数の巨石の一部として据えられている。磐境は囲い込んだ場所の「地のエネルギー」を吸収し

そのエネルギーの特殊な力によりつるつるに磨かれた鏡岩が光のエネルギーを全く減衰することなく反射するためには作られる。即ち磐境(ストーンサークル)はエネルギーの増強装置でありこれが日本列島に整然と張り巡らされた菱形ネットワークの交点に配置されていたから、逆に言うなら日本列島は極めて幾何学的に地下エネルギー噴出の特異点を有していたことになる。この特異点こそ東洋医学の「つぼ」に当る。

風水術では人体の経絡に当るのが龍脈でありつばに当るのが龍穴である。龍脈は連山の龍穴は連山に盆地の中心で盆地の多くなど盆地の多い中華人民共和国や韓国ほど必不可少とせざらず

図3-22 巨石(鏡石)による光通信ネットワーク

どには普及しなかった。縄文夢通信の菱形ネットワークは中国の風水術が目に見える地形に依拠しているのに対して直接は目に見えるわけではない。風水術は後には陰陽五行による方向を重視することになり必しも目に見える具象性に頼らなくなるが縄文夢通信のネットワークははじめから極めて抽象性に富んでいた。中国の風水術も最初は縄文夢通信同様の抽象性の高い地表技術であったのではないだろうか。中国の東北地方には現在でも巨石の傍で光を感受し夢通信をする坐者が存在し彼等は例外なく氣功の達人であると言う。このことは一〇年（九八年現在）ほど前に北京で日中神秘学ゼミナーがありここに参加した時に中国の学者から直接聞いたし又夢通信を今でもする氣功の達人にも直接会つた。

三章

了